



Title	「接種」の語史：種痘関連用語の生成と消長
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	阪大日本語研究. 2022, 34, p. 27-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88189
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「接種」の語史
——種痘関連用語の生成と消長——

The lexical history of *sessyu/jiezhong*:
Creation and selection of vaccination-related terms

田野村 忠温
TANOMURA Tadaharu

キーワード：「接種」、「種痘」、蘭方医学、和製漢語、日中語彙交流

要旨

「接種」はよく分からない語である。それは「読書」や「飲酒」のように動詞-名詞型の構成なのか。すなわち、「種^{たね}を接する」ということを表すのか。しかし、「種」は分かるとしても、それを“接する”とはどういうことなのか。

この疑問は「接種」の語だけを共時的に見ても解決しない。ここでは、「接種」を含む種痘関連用語の過去における使用状況の調査と分析に基づき、「接種」は19世紀に蘭方医学の文脈において日本語の漢語の特性を含む諸事情を背景として作り出された動詞-動詞型の語であるとする推定を述べる。

「接種」は19世紀末以後には中国語に借用され、定着した。「接種」の「種」は声調が一定しておらず、そのこともまた語構成の不明確さの反映であると考えられる。

1. はじめに

2021年は日本語で「接種」という語がそれまでになく頻繁に使われた年だったのであろう。しかし、考えてみれば「接種」とはよく分からない表現である。それは“種^{たね}を接する”ということなのか。感染症に対する抵抗力を生体に生じさせる物質を比喩的に“種”と呼ぶと言うのであればそこまでは理解できるが、それを“接する”とはどういうことなのか。種はまいたり植えたりするものであり、接するものではない。

この疑問は「接種」という1つの語だけを共時的に見ても解決しない。「接種」を理解するためには、中国語に由来し日本語に早くから定着した「種痘」という語、そして、その後日本で作られて使われ、もはや消滅した関連する2つの語——「接痘」と「種接」——をも視野に入れて考察する必要がある。

種痘の歴史に関しては国内外に医学史の立場からの研究の膨大な蓄積がある。この小論は言

語表現の観点から種痘に関わる用語の日中両語にまたがる展開の歴史を探ってみようとするものである。

以後、古い資料からの引用を含め、漢字は原則として現代日本の字体による。

2. 「種痘」

天然痘患者の体から採取した痘漿やかさぶたなどを使って罹患を防ぐ人痘法は中国で「種痘」と呼ばれ、1745（延享2）年に長崎に渡来した中国人種痘医の李仁山によって初めて日本にもたらされ、実施された（富士川（1904）¹⁾）。その後トルコ式の人痘法がオランダの医師や医学書を通じて伝えられた。そして、18世紀末には類似の症状を呈する皮膚病にかかった乳牛から採取した牛痘漿を使う安全な牛痘法が英国で開発され、19世紀に入るとその知識がオランダ、ロシア、中国を経由して日本にもたらされた。人痘法と牛痘法は原理は共通であり、「種痘」の語は牛痘法についても使われた。

「種痘」は本来中国語において動詞と目的語の名詞から成る動詞句である。「種_レ痘」と返読し、「痘を種_う（種_える）」などの形にして初めて日本語の語順に合う言い回しになる。「種痘_{しゅとう}」は、「読書」や「飲酒」などの語と同じく、返読を省いて2字をそのまま音読することによって作られた「直読語」（拙論（2020））である。日本語の「種痘」は名詞であり、それを通常の文の述語とするには和語の動詞を加えて「種痘す（する）」あるいは「種痘を施す」などの形にして使う²⁾。

18世紀終盤に筑前国秋月藩医緒方春朔は中国の医学叢書『御纂医宗金鑑』（1742（乾隆7）年）全90巻中の種痘巻（巻六十）に学んで種痘を実施し、同世紀末に日本で初めての種痘書として知られる『種痘必順弁』を出版した³⁾。和文で書かれた同書における「種痘」と「痘を種う」の出現例を挙げれば次の通りである。以後、資料からの引用に際しては適宜句読点の補充を中心とする調整を施す。「左：」は当の振り仮名が行の左側に添えられている——おそらく語の読みではなく平易な同義語を表している——ことを示す。

前_{サキ}ニ種痘_{しゅとう}必順_{ヒツシュン}ノ理ヲ論シ録スルニ華文ヲ以シ、崎_{サキ}陽_{ナガサキ}ノ客中清人某_{トウジン}ノ序ヲ得テ家ニ蔵_{シヨ}テ子弟ニ示スノ備ヘトス。
夫痘_{ソレ}ヲ種ル_{左：アラマシ}ノ理ハ俗家ノ不_レ可_レ解_ス所ナリ。故ニ左ニ其梗概ヲ記ス。

（緒方春朔『種痘必順弁』、1795（寛政7）年）⁴⁾

19世紀に出版された牛痘法に関する書籍2点における返読の例も示せば次の通りである。そ

れぞれ中国、オランダの種痘書を基礎として書かれたものである。

痘を種る人左の手に小児の臂をしかとらへ伸び縮みさせぬやうにし、右の手に刃尖
を以て佳苗を少しつけて両臂の消燂、清冷淵⁵⁾の穴へ二粒づゝ種べし。

(小山肆成『引痘新法全書』、1849(嘉永2)年)⁶⁾

痘ヲ種ルハ臂ノ上辺ヲ撰ヒ法ニ照シテ種ルコト。

(ヨハン・スコール著、高橋文郁訳『牛痘種法小論』、おそらく19世紀中葉)⁷⁾

当時の文献には「種痘」以外に「種法」「種術」「種後」「種処」などの表現もしばしば現れる。それらは音読されたであろう。とすれば、「種痘」は「痘を種す」とも読まれたと考えられるが、そのような事例は多くは見出せない。例えば、『医宗金鑑』の種痘巻の和刻本『御纂医宗金鑑 編輯幼科種痘心法要旨』(1778(安永7)年)⁸⁾においても「種^{ユル}痘^ノ之法」「種^ル痘^ハ者」のように付訓されている。

張(2016)、邱(2019)によれば、明代から清代初期にかけての中国においては「種痘」は“痘を種える”ことではなく、“天然痘が発症する”ことを言うのに使われていた。関心を引く指摘ではあるが、そうした古い用法はここでの考察には関わりを持たない。

3. 「接種」

種痘はその後「接種」とも呼ばれるようになった。それはオランダ語の翻訳によって作られた表現であった。

『種痘必順弁』は中国の医学書に基づいて書かれているが、「紅毛医ト種痘ヲ論ズ」と題された一節があり、著者が1793(寛政5)年の春に長崎の「西洋館」を訪れてオランダ商館長(カピタン)や商館医と交流したときのことが次のように記されている。巻頭の凡例に、“種痘に対する人々の不信を払拭するために、自分の経験に加えて「^{フランダヤシキ}荷蘭ノ論、^{カラノヒト}華人ノ説等」も載せ、外国における種痘普及の証とする”という説明がある。文中に現れる「ケルレル」はドイツ人商館医 Ambrosius Lodewyk Bernhard Keller を指す⁹⁾。また、木偏の「接」は「接」と読み替えて差し支えない¹⁰⁾。

左^{ツウシ}司堀、石橋ノ二氏ヲシテ語ヲ通^{カヨハ}シ天文地理等ノ説ヲナシ、内外治療ノ^{ダン}譚ニ及ニ、解体蔵象ノ図、蠟ヲ以テ製造スル偶人ヲ出シ、諸液ノ変異ヨリ諸症ノ因テ作ルノ理ヲ示シ、終ニ種痘ノ説ニ至ル。紅毛ニ此術有リヤ否ヤト問。「ケルレル」ノ曰「インゲンチンゲハンキ

ンドルホツケン」ト答ルノ語ヲ石橋翻訳シテ曰、「インケンチンゲハン」ハ^{左:ツギキ}接木ノコトヲ云、「キントルホツケン」則痘ノ蘭名ナリ、之ヲ和語ニ訳センニハ猶接木疱瘡ト云ンガゴトシ。
(緒方春朔『種痘必順弁』、1795(寛政7)年)¹¹⁾

緒方春朔が“オランダにも種痘はあるか”と尋ねたところ、ケルレルは“種痘はある、オランダ語では「インゲンチンゲハンキンドルホツケン」と呼ぶ”と答えたと言う。その名称はオランダ語の“inenting van kinderpokken”を表すと見られる。“天然痘(kinderpokken)の接ぎ木(inenting)”ということである。種痘を植物の栽培法に見立てて接ぎ木と表現するのは、天然痘の患者から痘苗^{とうびょう}を取り、それを別の人の体内に植え付けて成長させる——皮疹を生じさせる——という理解に基づくものであろう。それは“種痘”や“痘苗”についても共通で、種痘の処置は中国でも西洋でも当初から多く植物の栽培の比喩によって語られてきたと言える¹²⁾。

『種痘必順弁』には「接木」——その意図された読みはおそらくセツボクであろう——と「接木疱瘡」という表現が出て来るだけであるが、大槻玄沢『西賓対晤』^{たいご}に収められた1794(寛政6)年の記録には「接痘」の語が現れる。『西賓対晤』は「寛政六年(一七九四)から文化十一年(一八一四)まで六回に亙り、江戸参府の和蘭甲必丹^(オランダカピタン)一行を訪ねて質疑を行った玄沢の手記」である(山形(1983))。次に示すのは、1794(寛政6)年の和暦5月5日の訪問時における大槻玄沢と医師ケルレルのあいだで通訳を介して行われた対話の一部である。緒方春朔が長崎でケルレルに会ったときから1年後のことである。

^{ケルレル}切爾列爾余ニ問フ、貴邦種痘ノ法アリヤ。余医宗金鑑ノ載スル所ノ法ニ從テ我方施シ用ルコトノ大略ヲ告ク。切爾列爾曰、此レ支那所用ノ法ニシテ余曾テ聞ケリ、其法施シテ功ナシ。此ニ一良法アリ。小兒ノ左右臑臂ノ内【ここに腕の図あり(引用者注)】コノ仮点ノ所一ヶ所ランセト¹³⁾ニテ小^(小さな傷)瘡ヲ作り其内ニ極テ輕キ順痘ノ膿水ヲ一点トリテサシ入レオクヘシ。(中略)余曰此法已ニ「ヘイステル」外科書手術部第十五篇ニ出セルノ法ト似タリトイヘハ、其法ト甚相同フシテ且簡便ナリトイフ。退テ按ニヘイステル五百十七号載スル所詳ニシテ且尽セリ。訳文別ニアリ。和蘭ニテハ「インエンテン デル キンデルポッケン」ト云フ。「インエンテン」ハ接クコトナリ。「キンデルポッケン」ハ痘瘡ナリ。唐山ニテ種痘トイヘ、西洋ニテハ接痘トイフ。

(大槻玄沢『西賓対晤』、1794(寛政6)～1814(文化11)年)¹⁴⁾

“日本に種痘はあるか”と尋ねられて大槻玄沢が中国から伝来した種痘について答えたところ、ケルレルは“それは効果がないと聞いた”と言って西洋で行われている種痘法を説明した。

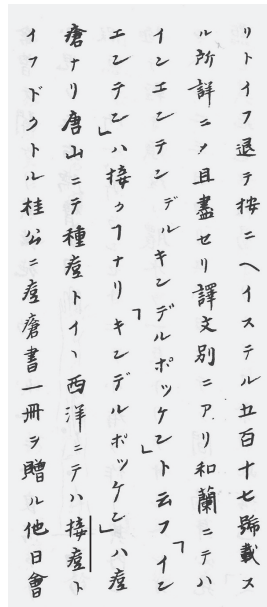


図1 「接種」の初出例——『西資対晤』

そして、その対話の記録に対する補足として、ケルレルの話した種痘法はヘイステル原著の外科書——オランダの翻訳外科書 Lorenz Heister 原著、Hendrik Ulhoorn 訳 *Heelkundige Onderwyzingen* (外科学教程) (1741年初版) を指す——に詳しく書かれており、すでに自分の未出版の翻訳がある（後述）、オランダ語の「インエンテン デル キンデルポッケン」——すなわち、“innten der kinderpokken”——の「インエンテン」は「接ぐ」ことを表す、中国では「種痘」と言い、西洋では「接種」と言う、と述べられている。「接種」は、「種痘」に基づき、その「種」を「接」で置き換えて作られた語だと考えてよいであろう¹⁵⁾。

大槻玄沢の翻訳（重訳）したヘイステルの外科書は『瘍医新書』と題された。それは結局部分的に出版されるにとどまったが、1816（文化13）年には種痘に関わる記述の抄訳が『接痘』——内題は『瘍医新書卷之三十二 接花痘篇第十五』——として出版された¹⁶⁾。書名の『接痘』は「接種」と同じことである。同書では本文でも「接」と「接」、 「豆」と「痘」が混用されている。『西資対晤』に「訳文別ニアリ。」と書かれていたのは、この『接痘』に相当する部分がすでに翻訳してあったということだと考えられる¹⁷⁾。

『接痘』には、「接種」の造語の背景がより明確に述べられている。本文には、“『瘍医新書』で解説されている手足の1か所に小さな傷を付けて痘漿を植える安全な方法は、『医宗金鑑』によって伝えられたかさぶたを鼻の中に吹き込む旧来の危険な「種痘」とは異なる、したがって、名称も変えて「接痘」とする”という趣旨の説明があり、扉の裏に置かれた編者¹⁸⁾による刊行

の辞には「旧伝の種痘とは大に異にして原名^{・・・・・}に^{（接痘）}対訳して新につぎもがさと新名を施さる捷徑法なり。」と書かれている——「もがさ」は天然痘の古名——。これにより、「接痘」が現にオランダ語の表現 “inenten der kinderpokken” を翻訳して作られた用語であることが確かめられる。ヘイステルの原書 *Chirurgie* (外科学) (1718年初版) はドイツ語書であり、種痘の記述を確認することのできた1724年版を見ると、オランダ語訳の inenten、inenting に対応する箇所はやはり“接ぎ木”を表すドイツ語の belzen や inoculiren、inoculirung によって表現されている¹⁹⁾。「接痘」の「接」は——そして、この小論の主題である「接種」の「接」も——直接的にはオランダ語の inenten、inenting の翻訳であり、さらにさかのぼればドイツ語その他におけるその同義語に由来することになる²⁰⁾。

『接豆』の出版後、「接痘」の語は他の医学書でも使われるようになる。確認できたその最初の例を示せば次の通りである。書名中の「^{ばい}徴」は「^{ばい}徴毒」、すなわち、「梅毒」を表す。

^{（ママ）}小女、年十一、由^テ接痘法^ニ発^ス輕症ノ痘瘡^ヲ。
 （布連吉著、杉田^{フレンキ}立^{りゅうけい}卿訳『^{ばい}徴瘡新書』、1821（文政4）年）²¹⁾

『種痘必順弁』、『接豆』、『^{ばい}徴瘡新書』に述べられた種痘は人痘法であったが、牛痘法を紹介した高野長英の『牛痘接法』においても「接」が使われている。『牛痘接法』は、その内容から考えて、牛痘法を伝えるオランダの種痘書 Heimann Joseph Goldschmidt *Algemeene Beschouwing van de Geschiedenis der Koepokken, en Derzelver Inënting* (牛痘と牛痘接種の歴史に関する一般的考察) (1802年) の抄訳であると見られる。

真痘ハ接後尤モ漸次ニ発見ス。(中略) 偽痘ハ否ラス。接後忽チニ発見ス。毒液ヲ伝フル処
 第二日ニシテ直チニ^{（きんつう）}焮痛ス。

天行ノ痘瘡ヲ患フル人ニ牛痘ヲ種液トシ接スレハ疹ヲ発スレトモ其本性ヲ変シ真ノ牛痘性
 ヲ保ツ事ナシ。
 （高野長英『牛痘接法』、19世紀前半）²²⁾

高野長英は別の医学書の翻訳『居家備要 治術篇』巻之五（1831（天保2）年）においては「接痘」の語も用いている²³⁾。

もっとも、あらゆる書き手が旧来の「種」をやめて「接」を使うようになったわけではなく、上記のオランダ牛痘書の抄訳である有馬摂蔵訳『牛痘新書』においては「種」が使われている。次は上に引用した高野長英の翻訳2か所に対応する翻訳である。

真牛痘ハ種後徐々ニ発ス。(中略) 仮牛痘ハ然ラス。経過速ニシテ既ニ第二日ニ至テ種^(きんしょう)炊^(きんしょう)衝^(きんしょう)ヲ発ス。

已ニ天然痘ニ感スル者ニ純正ナル牛痘ヲ種ユルトキハ局処ニ於テ猶能ク疱ヲ発ス。然レトモ此疱ハ牛痘ノ本性ヲ失フ者也。

(ゴルトスミット著、有馬摂蔵訳『牛痘新書』、1850(嘉永3)年)²⁴⁾

馬場貞由がロシアの種痘書に基づいて翻訳し、日本で初めて牛痘を紹介した『遁花秘訣』においても「種」が使われている。

種法数多アリト雖モ、中ニ就テ最モ信用スベク又痛ムコト少ク且誤ツコトナキ簡法ハ(後略)

牛痘ヲ種^(ママ)ヘ試シコト就中諸厄^(イギリス)利亜、熱爾瑪泥^(ドイツ)亜、弘郎察^(フランス)及ヒ我魯西^(ロシア)亜等ノ諸国ニ於テ多ク施セリ。是ヲ試ルニ毎時自然流行痘ノ伝染ヲ防クコト人痘ヲ種ルニ異ナラス。

(馬場貞由訳『遁花秘訣』、1820(文政3)年)²⁵⁾

次のように、人痘法には「種」を使い、牛痘法には「接」を使うと宣言している書き手もある。この書籍はオランダの複数の医学書に基づいて書かれている。

痘ニ正、種、接ノ別アリ。正トハ天然痘ヲ云。種トハ正痘ヲ種スルヲ云。接トハ牛痘ヲ伝ルナリ。種痘ノ伝ル也久矣。牛痘ノ発ル、于^レ今五六十年。其法一二人痘種法ニ倣フ。亦種ヲ以テ称ス。然レトモ予今種接ヲ別チ訳ス。種トハ種播ノ謂ナリ。柳子ヲ種シテ柳生シ、栗子ヲ種シテ栗生スルカ如ク、痘苗ヲ種シテ痘ヲ生スルナリ。接トハ接樹ノ接ナリ。牛痘ハ牛ニアリテ痘ニ非ス。唯人ニ伝ヘテ痘ヲ免ル、ヲ以テ牛痘ト云乎。(中略) 是レ何ソ^(いばら) 棘株ニ橙ヲ接シ、桃株ニ梅ヲ接スルニ異ナランヤ。

(武谷祐之訳述『接痘瑣言』附録、1849(嘉永2)年)²⁶⁾

接ぎ木がしばしば異種の植物を組み合わせて行われることに着目して、自分は牛痘法には「接」を使うと言う。オランダ語では接ぎ木を表す *inenten*、*inenting* が人痘法の段階から使われ、『種痘必順弁』や『接豆』でも人痘法の記述に「接」を使っているので、この著者の用語法は独自のものであることになる。

以上のように、「種痘」が中国語に基づいて作られた名詞であるのに対し、「接痘」はそれを蘭方医学の文脈において改変して作られたものであった。

4. 「種接」「接種」

18世紀中葉に中国語の表現に基づいて「種痘」の語が作られ、同世紀末には「接痘」の語も作られた。その後、加えて「種接」と「接種」の語も使われるようになったが、筆者の確認の限りでは、それらの最初の用例が見られるのは19世紀中葉である。「種接」と「接種」は19世紀にあっては平行して使われたが、20世紀になると「種接」は廃れ、「接種」に統一された。

「種接」と「接種」の成立の問題は不透明である。筆者が用例の観察に基づいて推定するところを以下に述べる。

おそらく「種接」と「接種」は共通の構成の同義語である。「種接」はほぼ確実に動詞-動詞型の表現であろうが²⁷⁾、「接種」は多くの現代日本人には“種を接する”という動詞-名詞型の表現であるように感じられる——これには、「当用漢字音訓表」（1947年）で「種」の字に“シュ”と“たね”の読みだけが示され、それまでは一般的であった“うえる”という動詞としての読みが省かれた、そして、それが「常用漢字表」（1981年）にも引き継がれたことが関係していると考えられる——。しかし、筆者の推定によれば「接種」もまた動詞-動詞型の表現である。すなわち、「種接」も「接種」も類義的な要素を重ねて作られた2字語であり、漢文の句と見て読み下せば「種接」は“種^う接^つぐ”であり、「接種」は“接^つぎ種^う”である²⁸⁾。

上の推定を明確に証明することはむずかしいが、まず「痘の種^{たね}」（小山肆成『引痘新法全書』）や「牛痘ヲ接ス」（高野長英『牛痘接法』）といった表現は見られるものの、「種」と「接す」を組み合わせた「種を接す」という言い回しは見出せないという事実がある。これとは対照的に、「種痘」に関してはすでに見た通り「痘を種^うう」と読み下した言い回しがあった。加えて、次のような「種接」と「接種」を混用した例の存在も両者が等価の表現であったことを示唆している。

種痘トハ人痘若クハ牛痘ヲ種接シ、悪性ノ天然痘ノ厄難ヲ免レシムルノ法ナリ。而シテ人痘ヲ種接スル法ハ早已ニ支那ニ行ハレ、本邦ニモ行ハレタルモノナレトモ、時ニ或ハ危険ノ虞ヲ免レス。一千七百九十六年ジェンネル氏牛痘接種法ヲ発見セシヨリ益々安全ノ法トシテ世ニ行ハルハニ至ル。
（後藤新平『衛生制度論』、1890（明治23）年）

通常牛痘接種ヲ施ストキハ規トシテ只其種接部ニ於テノミ膿疱性発疹ヲ生シ（後略）

第三日ニ於テ接種部ニ劇甚ノ痒覚アル紅斑ヲ生シ、直ニ其尖端ニ小結節ヲ作り（後略）

（^まじまながのり^{（べ）}馬島永徳他訳『^{（べ）}鼈氏²⁹⁾内科学』上巻式、1903（明治36）年）

「種痘」と「接痘」に加えて「種接」「接種」という語が作られ、普及したのはなぜだったのか。それには3つの要因の関与が考えられる。

第1の要因は、「種痘」「接痘」と「種接」「接種」との意味の差に関わる。次のような例を見れば理解の手がかりが得られる。

がんらい
原来種痘は毎五年或は七年に必ず接種し、老年に至る迄怠らず接種すべき筈のものなり。

(「痘瘡の話(下)」、『女学雑誌』第308号、1892(明治25)年)

この文で「種痘」と「接種」を入れ替えることはしにくいと思われる。すなわち、ここでの「種痘」は痘苗を用いる予防医療の方法の名称であり、一方、「接種」はその実施における具体的な行為、処置を表していると言える。

実際、「種接」と「接種」は“何を植え付けるか”を具体的に述べる文脈によく使われている。

種接法ハ、其目的、疾病ヲ防禦シ、或ハ試験ニ供ス。例之ハ牛痘ヲ種接シテ重症ノ天然痘ヲ預防シ、又痘瘡毒ヲ種接シテ、其二種アルヲ発見ス。

(エルメレンス³⁰⁾(ママ)講義、安藤正胤他記聞『原病学通論』巻之三、1874(明治7)年)

紀元千七百九十六年五月十四日シエンネル氏絞乳者ノ指ニ生スル所ノ疹液ヲ取り八歳ノ児ニ接種シ、同年七月一日同児ニ天然痘接種ヲ試ミシニ感染セサルヲ以テ牛痘ノ能ク天然痘ヲ予防スルコトヲ確認シ(後略)

(石上勝二・猪原徳太郎輯述『済生必携 伝染六病論』、1880(明治13)年)

最初の例にある「牛痘ヲ種接シテ」や第2の例にある「天然痘接種」は「牛痘ヲ種痘シテ」「天然痘接痘」と言い換えることもできなくはないにせよ、「痘」を二度ずつ含む重言的な表現になる。「痘」という名詞を含まない「種接す」「接種す」は通常「～を」の形で表される対象物の存在を前提とした表現であると言ってよい。すなわち、「種痘す」「接痘す」が少なくとも本来的には自動詞であるのに対し、「種接す」「接種す」は他動詞である。

第2に、「種接」「接種」が必要とされたことには医学研究の進歩も関わっている。種痘に類する処置は天然痘の予防以外の目的でも行われるようになった。上の『原病学通論』からの引用にも「痘瘡毒ヲ種接シテ」という表現が含まれていたが——「痘瘡」は梅毒による潰瘍——、ほかに次のような例がある。

ウェルレミン氏、コーリン氏、レベルト氏ハ結核ヲ獸類ニ種接シテ之ヲ感染セシメタリト云フ。

(長谷川泰訳『華氏³¹⁾病理摘要』上、1875(明治8)年)

パストール氏ハ二種ノ接種苗 Vaccins ヲ製シ、之ヲ第一苗、第二苗ト称ス。(中略)此二回

ノ注入ヲ受ケタル動物ハ脾脱痘ニ対シテ免疫性ヲ得、而シテ更ニ毒力猛烈ナル脾脱痘菌ヲ接種スルモ感染スルコト無キニ至ル。

(北里柴三郎口述、中川愛咲編『伝染病研究講義』、1896(明治29)年)

「疳瘡毒」「結核」「脾脱痘菌」はいずれも天然痘とは異なるので、それらに関する議論の文脈において「種痘」や「接痘」の語の使用は適さない。「痘」の字を含まない「種接」「接種」であれば、あらゆる種類の細菌や毒素に関して使うことができる。

しかし、それだけではない。第3に、「種接」「接種」が作られたことには日本語の漢語の特性も関わっていると考えられる。「～を種接す」「～を接種す」は元来「～を種う」「～を接す」などの形で表現されていた。すなわち、「痘を種う」「牛痘を接す」などと言っていた。したがって、その限りにおいては「種接」「接種」という語を作る必要はなかった。しかし、「種う」「接す」ないし1字の「種」「接」では表せることに限界がある。例えば「人痘の種接」「牛痘の接種」とは言えるが、同じことを「人痘の種^{しゅ}」「牛痘の接^{せつ}」などと言うことはできない。また、中国語では「種痘」と言うのと同じように「種人痘」「種牛痘」という動詞句を作れるが、日本語ではシュトウという名詞は作れても、シュジントウ、シュギユウトウという名詞は作りにくい——早期の文献には中国語の表現を踏襲して「種人痘」「種牛痘」を使っているものもあるが、やがて見られなくなった——。行為や出来事を表す動詞-名詞型の漢語名詞は「読書」「飲酒」「種痘」のように基本的に1字+1字のものに限られるからである。筆者の把握する現代の例外は「食牛肉(の習慣)」と「製菓子(店、用品)」くらいしかない(拙論(2020))³²⁾。「種人痘」「種牛痘」を日本語になじむ漢語名詞にするには、「種」を2字語に変え、要素の順も逆転して——すなわち、日本語の文法に従って主要部を後置して——「人痘種接」「牛痘接種」などと言い換える必要がある。そのように、「種接」「接種」のような語を作らなければ表現上の需要を満たすことができないという事情があった。

以上のようなことから、「種痘」「接痘」のように「痘」の字を含むことをせず、かつ、「種」や「接」の1字でもない漢語の造出が要請された、その結果が「種接」であり「接種」であったものと筆者は推定する。「種接」と「接種」は、「種痘」に含まれる「種」と「接痘」に含まれる「接」という2つの動詞的要素を重ねて作られたのであろう³³⁾。

「種接」「接種」の語が作られた時期ははっきりしない。筆者の確認できたそれぞれの最も早い用例を挙げれば次の通りである。第1の書籍は、上で触れた「種牛痘」という表現を書名に使っている。

人身自ラ牛痘ヲ発出スルコトナシ。唯之ヲ種接スルニ由テ発スルノミ。

(織田貫斎訳『蒲烈泄児種牛痘篇』、1850(嘉永3)年ごろ)³⁴⁾

政府に在ては牛痘の接種を受けざる小児を公行の学校に入るを許さざるべし。

(杉田玄端訳『健全学』下編巻之下、1867(慶応3)年)³⁵⁾

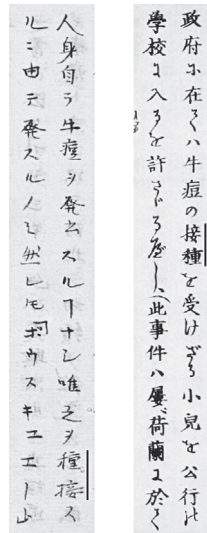


図2 「種接」「接種」の初出例——『蒲烈泄児種牛痘篇』、『健全学』

いずれもオランダ語の書籍の翻訳におけるものであり、「接種」に加えて「種接」と「接種」もまた蘭方医学の文脈において作り出されたと推定される。ただし、上の2例はともに既知の語という印象の書きぶりであり、実際の使用開始はさらに早かったはずである。

筆者の推定による「種痘」「接痘」「種接」「接種」という4語の日本語における発生の相互関係を図の形に整理すれば図3のようになる³⁶⁾。各語に添えた年は筆者がその使用を確認できた初出年である。

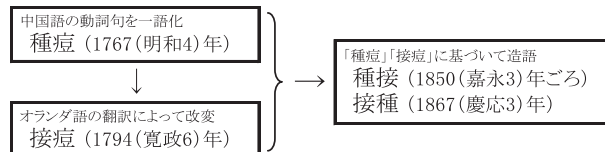


図3 「種痘」「接痘」「種接」「接種」の発生の相互関係

「種痘」の初出年を1767(明和4)年としているのは、『医宗金鑑』の種痘巻の和刻本『幼科種痘心法』³⁷⁾——2節で触れた『御纂医宗金鑑 編輯幼科種痘心法要旨』とは別物——の出版年

による。「種痘」という表現はさらに早い『種痘和解』（1746（延享3）年）（注3）にも現れるが、今や中国語で書かれた原文しか参照できず、そこには訓点もないので、日本語の用例と見なすことはできない。

最終的に「接種」は廃れて「種痘」に統一され、「種接」は廃れて「接種」に統一された。前者の変化は歴史の長い「種痘」が選ばれたものと考えられるが、「種接」が廃れて「接種」に統一されたこと理由は残念ながら不明である。医学界で用語の統一が図られたということかとも想像されるが、狭い範囲の調査の限りでは疑問の解決に十分役立つ情報は得られなかった。

5. 「接種」の中国への伝播

「接種」の語は現在中国語においても「接種疫苗」（ワクチンを接種する）などの形で広く使われている。それは日本で作られた語を借用したものであると見られる。

1872（同治11）年4月に発刊され、20世紀中葉まで発行された有力全国紙『申報』における関連語の使用状況を調べてみると——調査には「申報数拠庫」（<http://www.sbsjk.com/>）を使用——、「種痘」は同紙の発刊直後から現れる。中国におけるその歴史が長い以上、もっともなことである。それに対して、「接種」の出現は、植物の栽培の文脈におけるものを別とすれば、日清戦争後である。日本の医療の状況を紹介する記事中に初めて「接種」が現れる。

我友原口君名謙爾者日本医学士也。中東戦後航来申橘井杏林芳名籍甚邇者。（中略）君乃歴攷痘之源流与夫種痘之技術，箸為論說洋洋灑灑如数家珍。（中略）^{（ママ）}永嘉朝和蘭医士^{（ママ）}木誇鉄之幾氏始創行施種牛痘之術，伝至日本。互相接種其効昭然。（我が友人の原口謙爾君は日本の医学士である。日清戦争後に上海に来た高名な医師であり、天然痘の起源と種痘の技術に関する著述がある。（中略）嘉永期にオランダ人医師モーニッケ氏が牛痘法を初めて実施し、日本に伝えた。牛痘の接種の効率は明らかである。）³⁸⁾（「予防痘症篇」、『申報』1898（光緒24）年7月11日）

20世紀初頭の次の雑誌記事は日本の雑誌記事の翻訳である。日本語の原文と併せて示す。

然前年之試験則細菌之原菌作用曾試添食及注射于直腸。今年則不然、以皮下接種実験各種細菌對於蚕兒之作用。

（「蚕之細菌接種試験」、『農学报』卷二百九十六、1905（光緒31）年）
然し前年の試験では細菌の病原採用は添食³⁹⁾と直腸注射とで試みた。故に今年は前に試み

なかつた皮下接種で各種の細菌の蚕兒に対する作用を実験した。

(沢村真「蚕兒の細菌接種試験」、『大日本農会報』第279号、1904(明治37)年)

中国の辞書に「接種」が書かれたのは、筆者の確認の限りでは、顔惠慶『英華大辞典』(1908(光緒34)年)のinoculateの項目が最初である。発音に関わる表示は省いて引用する(以後同様)。

Inoculate, *v.t.* 1. To communicate a disease to a person by introducing infectious matter, (医) 種, 接種; as, to inoculate a person with the cow-pox, 種牛痘; 2. To graft, 接樹, 接芽, 駁枝; as, to inoculate a tree, 接樹, 駁樹; (後略)

陳(2019)によれば、同辞書は神田乃武他編『新訳英和辞典』(1902(明治35)年)の訳語を利用して編まれている。そこではinoculateは次のように説明されている。

Inoculate, *v.t.* ①芽接(メツギ)ス, 接木(ツギキ)ス. ②(医)接種ス.

『英華大辞典』は動詞「種」に加えてこの「接種」を訳語として挙げたことになる⁴⁰⁾。『英華大辞典』以前に出版された各種の英華辞典や新語辞典における inoculate の語訳は「種」「種痘」「種天花」「種苗痘」などであった⁴¹⁾。

以上のようなことから、中国語の「接種」は日本語から借用されたものであると確実に判断することができる。

ただし、念のために付言すれば、版を重ねた邱燾『引痘略』(注6)の1869(同治8)年に出た版——外題は『引痘方書』——の序文の1つに「接種」という漢字連接が出現する。

而嬰兒以痘瘍者甚衆，慨然思所以救之，属其子怡莊以重貲購牛痘種，自楚中復取多嬰，以次接種，而至請於制府陶公給予護照，以善其行。(天然痘で死亡する嬰兒が多いことから、(京江包君は)それを救済しようと考え、息子の怡莊に多額の資金で牛痘種を購入させ、湖北省中から多数の嬰兒を探しては次々に牛痘を植えた。そして、接種の円滑な実施のために総督の陶氏から許可証の発行を得た。)

(邱燾『引痘方書』、1869(同治8)年)

しかし、この「接種」は現在の一語化したそれではなく2語の組合せであり、「接」は“次々に”のような意味を表しているのではないかと思われる。調査の限りにおいて、種痘の処置を

表す動詞として「接」が使われた事例はこれ以前の中国語にまったく見られないからである。しかも、「接種」の“再出現”と普及開始は上述の通り約30年後の19世紀末である。『引痘方書』の序文に一度だけ現れる「接種」という言い回しは、差し当たり日本で作られ中国語に借用された「接種」とは関わりを持たないものと考えてよいであろう。

「接種」は中国人にとっても構成の解釈が一定しない語のようである。辞書は一般に「接種」における「種」の声調を第4声と記述するが、第3声を使うと言う話者も多い。第4声なら動詞、第3声なら名詞である。たいていの日本人が問われれば「接種」を動詞-名詞型の語と答えるのと相通じるところがある。もっとも、中国語では今も「種」が“植える”の意の動詞として普通に使われており、この問題をめぐる日中両語の状況が完全に共通であるわけではない⁴²⁾。

なお、「接痘」および種痘に関わる文脈における「種接」は中国の資料中には見出すことができなかった。

6. おわりに

蘭方医学を背景として、「種痘」の「種」を「接」に置き換えた「接痘」という語が18世紀末に作られ、さらに「種」と「接」を組み合わせた「種接」と「接種」という語が19世紀中葉までに作られた。「種接」「接種」はともに動詞-動詞型の語であった。以上の用語のうち「接痘」と「種接」の2語は20世紀には廃れた。「接種」は19世紀末以後中国語に借用され、定着した。

本小論の考察の発端は、日本語の漢語の特性について考察する過程で、「接種」を動詞-名詞型の語と見てよいのか動詞-動詞型の語と見てよいのか分からなかったことにあった。背景にある漢語の一般的な問題については拙論（2022）をご覧くださいければ幸いである。

注

- 1) 李仁山の職業と渡来年については異なる記述がある。緒方春朔『種痘必順弁』（1795（寛政7）年）（後出）は李仁山を「商客」（商人）、その渡来を「延享甲子歳」、すなわち、1744（延享1）年としており、それを直接、間接に踏襲していると見られる現代の文献も多い。

しかし、まず職業について言えば、李仁山は『種痘和解』（1746（延享3）年）（後出）——「和解」は日本語訳の意——の原本において自ら「種痘科李仁山」と記しており、医師だったと受け止めるのが自然である。広川^{かい}辨『長崎聞見録』巻之二（1797（寛政9）年）は李仁山の行った2件の医療の内容を「李仁山医案」と題して収めている。また、渡来年については、池田霧溪『種痘弁義』（1858（安政5）年）が「延享二年乙丑ノ四月」としているのに従った。何らかの正式な記録に拠って書かれたと見られる同書の記述のほうが

『種痘必順弁』より信頼性の高い印象がある。富士川（1904）は、渡来年を本文では1745年、巻末の「日本医事年表」では1744年としている。

なお、広川獬『長崎聞見録』の確認は丹羽漢吉校訂『長崎文献叢書 第一集第五巻 長崎虫眼鏡・長崎聞見録・長崎縁起略』（長崎文献社、1975年）に収められた翻字によった。また、池田霧溪『種痘弁義』の確認は国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/>）で画像が公開されている国立国会図書館蔵本によった。

- 2) 「種痘」をウエボウソウ、すなわち、“種え疱瘡”と読ませている文献も多い。一般にはシュトウよりウエボウソウのほうが平明で、通りがよかったと考えられる。ただし、ウエボウソウの語はここでの考察には関わらない。
- 3) 同書はその凡例に“先に種痘書を漢文で著して家蔵し、子弟に示す備えとした”という説明がある。したがって、同書は正確には日本初の種痘書ではなく、日本初の出版された種痘書であることになる。

未出版のものには、さらに早く、李仁山の著した種痘の解説を翻訳した『種痘和解』もある。池田霧溪『種痘弁義』（1858（安政5）年）によれば、1746（延享3）年に2人の通事共同で翻訳した同書を奉行に提出した。京都大学附属図書館に19世紀初期の写本があり——書名は『種痘書』——、国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベース（<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>）で画像が公開されている。ただし、当の写本は李仁山による中国語の原文だけで、日本語の訳文は省かれている。翻訳の現存は確認できなかった。

- 4) 引用は京都大学附属図書館蔵本による。新日本古典籍総合データベースで画像が公開されている。
- 5) 「消癰」とも書かれる「消癰」および「清冷淵」は上腕部の経穴——鍼灸のツボ——の名称（中医大辞典編輯委員会編（1986））。
- 6) 引用は京都大学附属図書館蔵本による。新日本古典籍総合データベースで画像が公開されている。

なお、同書は牛痘法を紹介する中国の邱熺（浩川）『引痘略』（1817（嘉慶22）年）に基づいている。「引痘」の「引」は、生まれつき体内にあると考えられていた天然痘の毒を“引き出す”、“抜く”ということだと見られる。張遜玉『種痘新書』（1741（乾隆6）年）には「痘乃先天之毒。（中略）以佳苗而引胎毒。」（天然痘は先天的な毒である。よい苗を使って胎毒を引き出す。）という説明がある。

『引痘新法全書』には「痘を引きて」「痘を引出す」などの言い回しが見られるが、ほかの出版物では「引て」「引痘」「引痘」のような振り仮名が加えられていることもある。「引」が「種」、「引痘」が「種痘」の同義語として扱われることもあったということである。

「引痘」という表現はここでの考察には直接的な関わりを持たない。

- 7) 引用は神戸大学附属図書館蔵本の写本による。新日本古典籍総合データベースで画像が公開されている。
原書およびその著者の「ヨハンスコール」については確認が取れなかった。
- 8) 確認は国立国会図書館蔵本による。国立国会図書館デジタルコレクションで画像が公開されている。
- 9) 大槻玄沢『西資対晤』（1794（寛政6）～1814（文化11）年）（後出）による。『種痘必順弁』はケルレルを「蘭医」としており、それを踏襲したと見られる記述も多いが、『西資対晤』は明確に「ホーコドイツ 泉名郷里ヲ「テウエイブリュツケ」ノ産」と出生地まで説明し——「ホーコドイツ」はHochdeutsch（高地ドイツ、南部ドイツ）のオランダ語形Hoogduitsであり、「テウエイブリュツケ」はおそらくZweibrückenのオランダ語形Tweebruggenであろう——、別のところには「言辞異ニシテ一句トイヘトモ我輩解了シカタシ」とも書いている。ケルレルは1784年には前年に流行した伝染病に関する書籍をドイツErlangenの出版社から出版している。

ケルレルのミドルネームのLodewykは文献によってはLodewijkと綴られ、また、ドイツ語形Ludwigに

よって書かれている。

- 10) 「接」は「接」の多義のうち接ぎ木の意味を特に表すもののようである（『説文解字』、『康熙字典』）。
- 11) 引用は前出の京都大学附属図書館蔵本による。引用に際しては原文における2か所の引用符の漏れを補った。
- 12) 参考までに言えば、19世紀初期に編まれ、現在『ゾーフハルマ』の名で通称される蘭和辞典は、早稲田大学図書館蔵の写本で確かめると、inentenを「樹を穿ちて接木する 又 植る」と説明し、「De docter heept dat kind de kinder, pokjes ingeent. 医者か其子に痘瘡を植へた」という文例を挙げている。同写本は早稲田大学古典籍総合データベース（<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>）で画像が公開されている。
- 13) 「ランセト」はオランダ語lancet。先の尖った両刃のメスを表す。
- 14) 文面の確認および図1は日蘭学会編『西賓対晤』（日蘭学会、1978年）に収められた静嘉堂文庫蔵の大槻玄沢自筆稿本の影印による。同書では引用符が必ずしも開きと閉じの組の形で使われていないが、引用に際しては2か所で引用符を補って現代の記法に合わせた。
- 15) 翻訳外科書*Heelkundige Onderwyzingen*の版の問題について言えば、大槻玄沢が読んだのはおそらく初版か第2版のいずれかである。同書には、確認できた範囲には1741年刊の初版、1755年刊の第2版、1776年刊の第3版と3つの版がある。『西賓対晤』に「ヘイステル五百十七号載スル所」云々と書かれているのは同書の517頁ということであろうが、初版と第2版では種痘に関する記述が517頁に始まり、第3版では507頁に始まる。
- 16) 確認は早稲田大学図書館蔵本による。早稲田大学古典籍総合データベースで画像が公開されている。
- 17) 『接豆』では漢字の不統一があるのみならず、「接豆」が「^{左:ツキモガサ}接花痘」とも書かれている。この「接花痘」は表記の構成について注意を要する。筆者はそれを見て、「接+花痘」という構成だろうと思ったが——「花痘」は「天花痘」と同じく天然痘を表す中国語の名称——、引用の最後で“種痘は接ぎ木によって別の樹木の「^{左:メツランキハナ}奇花」を咲かせるのに似ているから「接花」の2字を使って訳す”と明確に説明しているので、実は「接花+痘」という構成であることになる。「接花」「接花痘」の読みは示されていないが、おそらくセッカ、セッカトウであろう。
 なお、『接豆』は扉裏の刊行の辞によれば既成の訳稿を増訂したものであり、しかも、1825（文政8）年に出版された『瘍医新書』の最初の数巻が和文で書かれているのに対し『接豆』は訓点の付された漢文であるという大きな違いがある。『瘍医新書』の当初の翻訳の存在は確認できず、それと『接豆』との関係は不明である。
- 18) 編者は、大槻玄沢の子である大槻茂楨と大槻清崇である。
- 19) belzenは実際にはbeltzenと綴られている。inoculiren、inoculirungではren、rungの部分だけがドイツ文字で書かれている。おそらく語根がラテン語あるいは英語に由来するということを示すものであろう。
- 20) inentenの品詞に関しては注意すべきことがある。過去から現在に至るまでのほぼすべてのオランダ語辞典が単純にinentenを動詞、inentingを名詞として記述しているが、現実にはinentenは名詞としても使われている。『西賓対晤』の「インエンテン デル キンデルポッケン」はオランダの翻訳外科書の当該章の標題“Van het inenten der kinderpokken”（天然痘の種痘について）——英語に訳せば“Of the inoculation of smallpox”——から取られているが、それはinentenに名詞としての用法があってこそ成り立つ表現である。英蘭・蘭英辞典*Algemeen Woordenboek der Engelsche en Nederduitsche Talen*（総合英語・蘭語辞典）（1864年）は筆者の確認の範囲において inenten の名詞用法を記述した唯一の辞書で、英蘭の部の名詞 inoculation の項目に inënting と 't inënten —— 'tは定冠詞hetの短縮形——という2つの訳語を挙げている。
- 21) 引用は京都大学附属図書館蔵本による。新日本古典籍総合データベースで画像が公開されている。

「^{フレンキ}布連吉」はオーストリアの医師 Joseph Jacob Ritter von Plenck。

- 22) 引用は高野長英全集刊行会編『高野長英全集』第1巻（高野長英全集刊行会、1930年）における翻字による。
高野長英は1850（嘉永3）年に没しているので、翻訳は1802年から1850年までの期間に行われたことになる。
- 23) 引用は高野長英全集刊行会編『高野長英全集』第2巻（高野長英全集刊行会、1931年）における翻字による。
- 24) 引用は大阪大学附属図書館蔵の写本による。新日本古典籍総合データベースで画像が公開されている。
- 25) 引用は京都大学附属図書館蔵の写本による。新日本古典籍総合データベースで画像が公開されている。
原書は、村山(1966)によれば、「医学・博愛委員会」による *Способ избавиться совершенно от оспенной заразы посредством всеобщего прививания коровьей оспы* ——「牛痘普及により天然痘を完全にのがれる方法」——（1803年）である。
- 26) 引用は九州大学附属図書館蔵の武谷祐之自筆稿本による。九州大学附属図書館の Web サイト（<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/>）で画像が公開されている。
翻訳の原本については、巻頭の題言において「セリウス、スプレンケル、コンス、ヒユウヘランド、ゴルドスミット諸賢ノ書ニ就テ其要領ヲ採リ訳述シテ一冊子ヲ成ス」と説明されている。
- 27) 「草食」「詩作」「酒造」のように動作の対象を表す要素を前に置く名詞-動詞型の漢語もわずかながらある中で、完全にそのように言い切れるわけではない。
- 28) 便宜的に「動詞-動詞型」と「動詞-名詞型」という表現を使っているが、厳密に言えば正しくない。「種」も「接」も日本語では動詞ではなく、単なる造語要素に過ぎないからである。「種」「接」が動詞だと言えるのは中国語においてだけである。
- 29) 「^ベ鼈氏」はお雇い外国人として来日したドイツ人医学者エルヴィン・フォン・ベルツ（Erwin von Bälz）。
- 30) 「^ヘ垂爾茂聯斯」はお雇い外国人として来日したオランダ人医学者クリスチャン・ヤコブ・エルメレンス（Christian Jacob Ermerins）。
- 31) 「^ハ華氏」は米国人医学者ヘンリー・ハルツホルン（Henry Hartshorne）。
- 32) 「超高温」「超大規模」「反社会」「反核エネルギー」「対テロ」「対潜水艦」「要実談」「要実務経験」などのように1字+複数字の表現の生産的な型もある。しかし、それらは行為や出来事ではなく、事物や人の性質を表しており、本文で問題としている類の表現とは性質を異にする。
- 33) 中国の園芸書には「種接」「接種」という表現が使われていたので、それらが流用された可能性は考えられる。しかし、目下種痘に関わる用語としての「種接」「接種」が使われ始めた最初期の状況が分からず、真相は不明である。
- 34) 引用は大阪大学附属図書館蔵の写本による。新日本古典籍総合データベースで画像が公開されている。
写本は表紙に「紀元一千八百四十五年鏤行 蒲烈泄兒種牛痘篇」と題されている。これは、その内容を確認してみたところによれば、オランダで出版された Heimann Bressler の小児病学書 *De Kinderziekten*（小児病）（1845年）の種痘に関する記述の抄訳であることを示すと見られる。表紙には「嘉永三庚戌春二月」（1850年3～4月）とも書かれているが、その下に筆写者の名も記されているので、おそらく翻訳ではなく書写の時期であろう。いずれにせよ翻訳は1845年から1850年に至る時期に行われたことになる。
- 35) 引用は国立国会図書館蔵本による。国立国会図書館デジタルコレクションで画像が公開されている。
凡例における説明によれば、本書は英国人医師「ロベルト・ゼエムス・メン」による英文書をオランダ人医師「イ・ル・デ・プロイン・コプス」がオランダ語に翻訳、増補した『ゲソンドヘイドレール』を重訳したものである。片仮名で書かれた人名と書名はそれぞれ Robert James Mann、J. L. de Bruyn Kops、

Eenvoudige Gezondheidsleer: Een Boekje voor Allen (簡単な健康学習 万人のための小冊) である。

- 36) 「種痘」は漢語に関する一般的な理解に従えば中国語からの借用語であるが、中国語の動詞句に基づいて 1 つの不可分の名詞を作り出しており、そのような観点からすれば和製漢語の例である (拙論 (2020))。
- 37) 確認は九州大学附属図書館蔵本による。新日本古典籍総合データベースで画像が公開されている。
- 38) 日本に牛痘法を伝えたモーニッケ (Otto Gottlieb Johann Mohnike) はドイツ人であり、また、モーニッケが牛痘法を開発したわけでもないが、記事に即して翻訳した。
- 記事で「接種」の前に「互相」(相互に)と書かれているのはよく分からない。これは「接種」の語がまだ中国語になかったために、牛痘が人から人に植え継がれることの説明のつもりで付け加えた表現かも知れない。
- 39) 「添食」は養蚕学の分野における著述に見られる用語で、「桑葉に或る目的の物を塗抹して桑葉と共に食下せしむること」(石渡 (1934)) を表す。
- 40) 上田万年・上田敏『最新英和辞典』(1903 (明治 36) 年) も inoculate の語釈に「接種」を使っている。しかし、『英華大辞典』の inoculate の項目における「接種」という語釈が『新訳英和辞典』に由来することは、両辞典における vaccine とその派生語の項目に関する共通性が高いことなどから考えてほぼ確実である。
- 41) ちなみに、Wilhelm Lobscheid *English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation*『英華字典』(1866～1869 (同治 5～8) 年) は次のように種痘と植物の接ぎ木で「種」と「接」を使い分けている。

Inoculate, to, 種; to inoculate the cow-pox, 種痘, 種天花, 種天行; to inoculate a tree, 接樹, 駁樹.

Inoculating, as the small-pox, 種; ditto, as a tree, 接.

- 42) 中国語の辞書に書かれた「接種」の声調には、それが何に基づいているのかという問題がある。中国人が編集した辞書の場合、多音字——複数の発音を持つ字——である「種」を含む和製漢語の声調を誰が何を根拠に判断したのか。発音の慣習に基づいて声調を記述したのか、それとも、「種」の品詞の如何を考えて声調を決めたのか。あるいはまた、日本人が編集した辞書の記述を踏襲したのか。しかし、もし日本人が先に声調を決めたとすれば、それはどのようにして行われたのか。辞書に書かれた声調を決めたのが中国人だとしても日本人だとしても疑問が残る。

中国語の辞書において「接種」の声調が記述された早い事例は、筆者による粗い確認の限りでは、以下の通りである。「接種」の声調を示した最初の辞書は石山福治編『日支大辞彙』(1917 (大正 6) 年) であり、「種」の声調を第 3 声としている。「種」の声調を初めて第 4 声として示した辞書は中国にあっては中国科学院語言研究所詞典編輯室編『現代漢語詞典 (試用本)』(1965 年) であり——確認は 1973 年の増刷版による——、日本にあっては愛知大学中日大辞典編纂所編『中日大辞典』(1968 年) である。『中日大辞典』は「〔種 zhòng〕は植える意。」という説明を付している。しかし、それが“一般に第 4 声で発音されるから動詞だと分かる”ということなのか、“動詞だと思われるから第 4 声ということに決めた”ということなのかは不明である。

参考文献

- 石渡繁胤 (1934) 「てんしよく〔添食〕」佐藤寛次編『農業大辞典』下巻 (日本評論社)
- 田野村忠温 (2020) 「漢語複合名詞の形成と再分析—動詞・名詞型複合名詞の二義性—」『現代日本語研究』第 12 号 (大阪大学大学院文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室)
- 田野村忠温 (2022) 「日本語の漢語の文法的特異性とその中国語への影響—「設計」の近現代語史—」『大阪大学

大学院文学研究科紀要』第62卷

陳力衛（2019）『近代知の翻訳と伝播—漢語を媒介に一』（三省堂）

富士川游（1904）『日本医学史』（裳華房）

村山七郎（1966）『『遁花秘訣』原書の和訳（1）』『順天堂医学』第11巻第4号（順天堂医学会）

山形 徹一（1983）「大槻玄沢と『西賓対晤』」『日本医史学雑誌』第29巻第4号（日本医史学会）

邱仲麟（2019）「晚明人痘法起源及其傳播的再思考」『臺大歷史學報』第64期（國立臺灣大學歷史學系）

张一鸣（2016）『人痘接种术的文献研究』（中国中医科学院硕士论文）

中医大辞典编辑委员会编（1986）『中医大辞典』针灸、推拿、气功、养生分册（人民卫生出版社）

（文学研究科教授）